



明治八年租稅寮第六課年報

686



414
A1899



第六課年報

租稅寮

大正十一年四月

粵ニ昨七年十二月十二日稟白ヲ經テ立ル所ノ
 雜稅法草制課事務章程ノ文ニ遵ヒ我舊貫ノ稅
 法ヲ改革シ更ニ國府縣稅ノ新法ヲ草制センカ
 為ノニ夫ノ米英兩國ノ稅法書ニ就キ傍ラ佛國
 租稅書譯本田精カヲ參觀シ一向斯事ニ從フ此
 ニ數閱月因テ較着手ノ端緒ヲ得タリト雖モ然
 レ氏彼數國ノ稅法全ク我ト其制ヲ異ニシ民力
 ノ饒乏事業ノ差異アリテ輒ク之ヲ我ニ應用ス

大正十一年四月

ルノ方法ヲ發見スル甚タ易カラス夫レ米國ノ
税法ハ則チ下官親ク見親ク學ヘルヲ以テ僅ニ
得ル所アリ乃チ其國稅ハ專ラ酒類烟草等ノミ
ニ課スル所ニシテ法制ハ美ナリト雖モ彼此人
民之ヲ費消スルノ量極メテ懸隔アリ且其價直
モ甚タ同シカラサルカ故ニ唯此間稅ノミヲ以
テ我政府ヲ維持スルノ資ニ充ルニ足ラス又其
州稅ノ如キモ數種アリテ紐育州ノ稅制最モ簡
ニシテ要ヲ得ル者ト為セルモ其實產浮賦ノ原
價ヲ查定スルニ至テハ未タ脱漏猥雜ノ弊大ナキ

能ハス他加里蒲兒尼亞費兒的尼亞等ノ州稅ハ
大要紐育州稅法ニ似タレ氏亦繁累ノ冗法寡ニ
トセサルナリ英國々稅ハ則チ專ラ所入稅ヲ主
トシ地租ノ如キハ頗ル漫然トシテ課當ノ法極
メテ其要ヲ得ス且間稅ノ入量多クシテ己ニ之
レカ半ハニ居ル加旃ナラス所入稅ハ弊害誠ニ
多ク其人望ヲ失スルノ具タルトハ學者ノ常ニ
論スル所ナルカ故ニ是等ノ制法モ直ニ應用ス
可ラス獨リ地方稅ハ差取ル可キモノアルモ亦
捨ツ可キモノ少ナカラス是亦輒ク摹倣ス可ラ

サレナリ佛國税法ノ如キ其地租ヲ征スルノ方
法精且確ニシテ頗ル據ル可キモノアリト雖モ
我人民今日ノ状態ニ於テハ或ハ其繁ヲ厭フハ
虞ナキニ非ス且其譯稿僅ニ二卷ニシテ全鼎ノ
味ヲ知ルニ由ナシ然リト雖モ是等ヲ推察考求
シテ稍裁酌應用ノ端緒ヲ得サルニ非サレ氏只
未タ期成ノ方策胸中ニ熟セサリシ耳蓋ニ惟フ
ニ凡ソ國ノ税法ヲ立ル多クハ貫習ニ因ル者タ
リト雖モ其風俗ノ開進民業ノ増盛財政ノ運歩
治乱ノ勢態等ニヨリテ税制ニ関スルト甚タ少

カラス是ヲ以テ只目今ノ成法ニ就テ之レカ應
用ノ方法ヲ考定スルモ實際ノ利病ハ豫ノ期ス
可ラサルモノアリ是レ下官カ斯事ニ從テ己ニ
數月ヲ閱ルモ未タ勞慮ノ成果ヲ得サリシ所以
ナリ將夫レ税法ノ變遷利病得喪ヲ詳ニスル宜
シク之ニ用アルノ書ニ頼ラサルヲ得ス因テ益
精ヲ勵マシ愈慮ヲ一ニシテ英佛米諸國ノ學士
カ著ス所ノ經濟書十數部及ヒ專ラ税法ノ利害
ヲ論スルノ書五七部ヲ研究スル又數閱月ニシ
テ遂ニ大ニ得ル所アリ因テ之ヲ嚮、諸國ノ税

割并ニ我邦現行ノ税制ニ比シ益覃思熟慮シ
テ方纔ニ茲ニ將來制立ス可キ税法ノ目的ヲ立
ルヲ得タリ是ニ於テ筆ヲ下シテ華税說ヲ作ル
蓋シ其要旨タルヤ地租ノ課法ヲ改革シ專ラ餉
直ニ課シテ而シ家稅ヲ起シ家屋屋地ノ餉直ニ
視テ以テ分限稅ヲ起シ間稅ハ則チ烟草茶砂糖
酒類等ニ課シ海關稅ハ則チ内國工作ヲ保護ス
ルノ目的ヲ以テ其課法ヲ定ムルニ在リ今夫レ
下官カ此定見ヲ立ルニ至ルハ一朝忽卒ノ頓按
ニ出ルニ非ス皆能ク其至理ヲ究ノテ而後得ル

所ナリ故ニ說或ハ多岐ニ似タルアリテ利害ノ
直ニ辨知シ難キ條件ハ數家ノ說ヲ照攷シ反覆
論辨其端ヲ叩テ盡サントス蓋シ各稅ノ利病ハ
外邦學士モ各其所見ヲ異ニシテ未タ一定ノ通
論ナシ況ヤ下官カ草立スル所ノ制法ノ如キハ
世必ス疑ヲ容ル、モノ多カル可ケレハ之レカ
說ヲ詳カニシ之レカ證ヲ明サレ能ハサルカ故
ニ稿本隨テ浩瀚ニ涉ラサルヲ得ス是ヲ以テ究
成ノ日亦未タ竣セサルナリ然レ氏其第一卷ノ
租稅要義ヲ論述セルモノハ十月中稿全ク成テ

己ニ之ヲ呈セリ第二卷ハ地租ノ事ヲ論スルヲ
以テ七月中地方官會議ノ時ニ際シ或ハ参照ノ
資ニ供セテレントヲ慮リ忽々大要ヲ蒐綴シテ
之ヲ献セシモ爾來能ク之ヲ尋究スルニ網罟遺
漏猶ホ少カラス因テ方ニ今之ヲ修刪補綴シテ
稿已ニ半ハ成レリ他家税分限稅等ノ論說ハ腹
稿稍成ルト雖モ團圓ノ局ヲ結フハ明年三四月
ノ間ニ在ル可シ又近日課員松浦氏ニ囑シ新法
ノ大意ヲ草セシム其論旨モ專ラ實際ニ涉ルヲ
以テ其課賦ノ准抵ヲ定ムルニ精細ノ算計ヲ要

スルカ故ニ是亦未タ全ク稿ヲ脱セス然レ氏此
レハ必ス來一月ヲ期シテ呈スルヲ得可シ今茲
ニ本年ノ事務ヲ終ルノ時ナルヲ以テ聊カ課業
ノ成果ヲ開報シ因テ草稅說ヲ作ルノ由來ヲ陳
述シ併セテ將來立制ノ大意ヲ條道シ以テ賢裁
ニ供スト云爾

明治八年十二月 日 租稅助 若山儀一
租稅權頭 吉原重俊殿

將來制定ス可キ税法ノ腹稿

第一條 分限税

石税ノ主意ハ所入税ニ似タリト雖モ所入税ノ如ク漠トシテ其矩護ノ憑ルヘキモノ無キカ如キニ非ス乃チ家屋屋地ノ就直ニ視テ以テ其住者ノ分限ヲ知り之ニ應シテ課スルノ税ニシテ英國ノ學士等モ亦家屋ノ就直ハ其住人ノ分限ヲ知ルノ一良矩護ナリトシ紐育ノ人阿布大屈氏モ其説アリ近日沕尔斯氏始メテ之ヲ實產浮財ノ税ニ代ヘンヲ論述セ

リ事ハ章稅說中ニ載ス可シ

此稅ハ貧富貴賤大抵其各ニ應シテ課ヲ負フ可シト雖モ層進スル毎ニ其課ヲ重クスルヲ以テ最良ノ法トス又日工傭作ノ貧民ニ及ハシテラ虞リ若干ノ餽直ヨリ以下ハ免稅ノ則ヲ立ツ可シトス

第二條 家屋稅

此稅ハ家屋ノ餽直ニ准テ課スルナリ我邦從來家稅ノ制ナシ曩ニ明治四年中東京府之ヲ課セシトアリト雖モ其目的トスル所稅法ノ

本義ニ合ハス且賦當ノ方法モ亦疎漏ヲ極メタルハ終ニ民心ニ慍ハサルヲ以テ之ヲ廢セリ然レモ法割果シテ其宜キヲ得テ賦課スルニ於テハ必ス民心ニ背ク可キノ稅ニ非ラサルナリ

第三條 地租

凡ソ家屋屋地ノ餽直ハ猶ホ貸金ノ利子ノコトシ只其中幾分カ全得ト為ス可ラサルモノアルカ故ニ能ク此ニ注意シテ賦當ノ准抵ヲ慎ムトキハ最モ良善ノ稅法ニシテ最モ弊害

弊害ノ下海ニ或ハ家屋土地ノ修好ヲ妨クルニ因テ實テ字ヲ脱ス

アリト論スル者アリト雖モ下官ハ則チ其税
ノ害ニ非スレテ而ノ課法ノ當ヲ得サルニ出
ルヲ信ス但改正地租ノ法ノ如ク強テ四公六
民ノ賦課ニ牽會セントシテ地價ヲ定ムル如
キ權術ヲ用フルハ甚タ税法ノ本義ニ非ス且
其課當ノ苛重ナル必ス久ク人民ノ其擔ニ堪
フヘキニ非ス又市府ノ地ハ地主カ報白スル
所ノ價ニ據テ之ヲ課ス甚タ偏頗ノ法ト謂フ
可シ但シ市府ノ賦直ト耕地ノ賦直トハ其原
質タル者自ラ異ナリ譬ヘハ市府ハ則チ家屋

其他建築修好等ニ

供給需用地位等大ニ之ニ
關係スルハ言ヲ俟タスト

雖モ姑ク
ク論セズヨリテ賦直ヲ多寡ニ耕地ハ則チ收
獲ノ量ヲ以テ賦直ヲ増減スルカ如シ殊ニ我
邦ノ習俗タル耕地ヲ他人ニ佃セシムルニ建
築修好等ハ地主カ支給スル所ニ非サルヲ以
テ全ク地力ノ一偏ノミ賦直ノ原質ヲ為スニ
似タルアリ故ニ是等ヲ酌奪スルハ此兩地ノ
賦直ニ課スルノ税モ其理致ヲ同クスル能ハ
ザルハ論ナシト雖モ現行税法ノ如ク杜撰ノ
制ニテハ永ク施行シ得可シトハ信セラレズ

其詳ナルヲハ華稅說ニ論述ス

第四條 間稅

間稅ハ未タ精密ニ研求シ能ハスト雖モ大抵國稅ニ給ス可キモノ左ノ四品ヲ以テ最ナリトス

○茶 ○烟草 ○酒類 ○砂糖

右ノ中酒類ハ已ニ其稅アリ烟草モ亦明年ヨリ之ヲ賦課セラルト蓋シ其制法中少ク議ス可キモノ無キニ非スト雖モ先ツ之ヲ施行シ實際ニ於テ若シ害アルモノハ時ニ臨テ宜キ

ニ改ム可ントス茶砂糖ハ則テ未タ其課ナシ按スルニ此二物ハ方今萬國ニ於テ日常需用ノ物品タリト雖モ健康學化學等ノ理上ヨリ之ヲ觀ルトキハ人身滋養補給ノ益タル實分甚タ少シ茶ノ如キハ最モ然リ且其産スル處ハ我ト支那印度トノ外誠ニ少ク殆ント專占ノ權ヲ有セルモノニシテ近來ハ輸出極メテ多ク内國ノ費消スル所確実ヲ得ル能ハスト雖モ顧フニ其量大ナル可ク且外邦ニ於テハ通常用フル所ハ一介ニシテ其價一元ヨリ二

元マテノモノヲ以テ其上品トス然ルニ我邦ノ人民ハ則チ其價八元ノ貴キヲ用フルモノアリ豈奢侈ノ品ニ属スト謂ハサルヲ得ン哉蓋シ下官カ此物ニ課税セント言フノ意ハ敢テ奢侈ヲ禁スルカ為ニスルニハ非サレトモ素ト半須羊糜ノ品タレハ之ニ税スルモ税法ノ要義ニ於テ曾テ忌嫌スル所アルナレトス且其政府ノ歳入ニ益スルヲ烟草ニハ劣ラサル可レト信ス又砂糖ノ如キ國産寡シト雖モ需用ノ量頗ル大ナルヲ以テ内國稅ト海關

稅トニテハ其收額寡カラサル可レ但シ右等ノ諸物ニ稅スルニ於テハ必ス保護稅法ヲ兼用シ以テ内國ノ出產工作ヲ獎勵セサル可ラス譬ヘハ茶ノ如キハ一切輸入ヲ禁スルモ可ナル可シ是レ實際我ニ入ルモ甚タ寡ケレハナリ又其輸出ニ當テハ皆其稅ヲ免シ稅関ニ於テ還稅ノ制ヲ立ツ可レトス將タ砂糖ノ如キハ本邦產處ニ乏シキヲ以テ後未支那印度澳斯太刺利亞西印度等熱帶地方ノ產ト市場ノ權ヲ争フハ恐ラクハ難カル可レト雖モ四國ノ南岸九州南

方ノ地球伊豆七島無人嶋等ノ如キ地方ニ
耕植セハ内國ノ需用ニ充テ、猶ホ餘リアル
可シ果シテ斯ノ如クナルトキハ内國ノ税ハ
之ヲ輕クシ輸入税ハ之ヲ重クセハ自ラ耕植
淨製ヲ獎勵スルヲ得可シ又物品税中絹類ニ
課スルノ税モ亦宜ク算入ス可シト雖モ其課
賦ノ法甚タ難ク且却テ府縣等ノ税中ニ加フ
ルヲ良トスルノ所見アルヲ以テ今茲ニ載セ
ス

又問税中專ラ緊要ト為ス可キモノハ印紙税

ナリ下官カ所見ニテハ上文ニ所謂四品モ亦
印紙ヲ以テ其税ヲ收ムルヲ善トス蓋シ從來
行ハル、證券印税法ハ少シク議ス可キノ項
ナキニ非スト雖モ是亦業已キ人民ノ習貫ス
ル所ナレハ今暴カニ改メサルヲ優レリトス
但シ其理論ハ草税說中ニ演述ス可シ又左表
ノ數品モ各國ノ制ニ倣テ印税ヲ賦課スルト
キハ歳入ヲ資スルノ一助トナラスンハアラ
サルナリ

表目ハ下ニ掲ク

右數種ノ者ハ先ツ之ヲ國稅トナス可シ且此諸
稅ヲ施行スルニハ左ノ數件ヲ以テ缺ク可ラサ
ルノ要事トナス

收稅區ヲ立ル事

凡ソ此區ヲ立ルノ趣意ハ則チ從來ノ稅法ニ
於テハ國府縣稅等ノ別アルヲナク大政府ニ
納マル所ノ歲入多クハ其令知事ノ所管スル
所タルカ故ニ地方ノ稅一旦大政府ニ納マリ
テ又之ヲ支給スルカ如キ煩冗ナル勞手ヲ要
シ殊ニ士族華族ノ家祿賞典祿等モ一先ツ

大藏省ニ入ル者ヲ以テ再ヒ出シテ之ニ支給
スル等帝ニ煩冗ナル勞費ノ多キノミナラズ
沿術ニ於テ或ハ得來少カラサル可シ元來收
稅ノ事務ハ其地ニ就テ擔當スルニ非サレハ
精確ニ舉行スルヲ難キナリ乃チ米國ノ如キ
下官カ親見スル所ヲ以テスレハ其大政府ニ
入ルノ稅ハ烟草酒類ニ課スルノ間稅ノミナ
レトモ國ヲ二百四十餘區ニ大別シ又之ヲ數
小區ニ分ケテ之ヲ收ムルナリ殊ニ我邦ハ則
チ直稅ヲ專ラトスルヲ以テ若シ此區ヲ立

ルトキハ石ニ條列スル三種ノ直税ヲ收ムル
カ為メニ大ニ利便ヲ得可シトス又從來ノ景
況ヲ以テ之ヲ觀レハ知事縣令等原ヨリ私惠
ヲ施シテ人望ヲ收ムルノ趣意ニハ非サル可
ケレトモ輒モスレハ其弊害ニ陷リ廟堂ノ盛
旨下通セサルヨリ税官トノ間其所見ノ齟齬
スル所アルヲ免ル、克ハス蓋シ斯區アルヨ
リハ必ス此害ヲ濟フ可シ加之ナラス大藏省
ヨリ測量檢獲等ヲ為スカタメニ派出スル所
ノ官員ニ要スル冗費ヲ省スルヲ得可シ此他

立區ノ缺ク可カラサルノ條款枚舉ニ違アラ
サルナリ

保税庫ヲ設クル事

問税ヲ課スルニ於テハ保税庫ヲ設クルハ缺
ク可ラサルノ要事タリ譬へハ印紙税ヲ酒類
ニ課センニ造酒家一時ニ之ヲ致スニ堪フル
ト克ハサルトアルトキハ先ツ收税官ノ免許
ヲ受ケ假リニ此庫中ニ納メ賣主ノ在ルアル
ヲ待テ而後其税ヲ賣主ヨリ收ムルモ亦買者
ニ納レシムルモ時宜ニ從テ處置スルトキハ

納税者ノ為ニ甚タ利便トナルカ如シ又此庫
ヲ設クルトキハ大ニ脱税ヲ防クノ助ケトナ
ル可シ故ニ曰ク此庫ハ間税ヲ課スルニ於テ
缺ク可ラサルモノナリト然而ノ此庫ヲ設ク
ルモ亦收税區ヲ分ツニ非サレハ其主的トス
ル所ヲ舉行スル克ハサルナリ

記録局ヲ設クル事

此局ヲ設クルノ主意ハ地券家券ハ論ナク総
テ貸借ノ典當ニ出セルモノヲモ此局ノ簿中
ニ記載スルトキハ大ニ争訟ヲ省シ且國中實

産ノ額ヲ知ル可ク國中實産ノ額ヲ知ルトキ
ハ則チ國民ノ力ヲ詳ニスルコトヲ得可ク國民
ノ力ヲ詳ニスルヲ得レハ則チ治術ニ於テ資
クル所大ナル可シト云フニ在リ但新建ハ登
時費用ノ恐レアルカ故ニ假ニ戸長ノ扱所ヲ
以テ之ニ充ルモ可ナル可シ

石ハ新法ヲ設立スルノ大畧ナリ中ニ就テ分限
税ハ最モ良法ナリト信ス然レ氏我邦ノ俗タル
ヤ概シテ之ヲ言フトキハ富テ陋室ニ住スル者
アリ貧ニシテ美屋ニ住スル者アリ是ヲ以テ其

分限ヲ量ル克ハサルニ似タリト雖モ商ノ如キ
ハ大抵其業ノ盛衰ニ應シテ相當ノ肆店ヲ構成
セサル可ラス農モ亦大農ハ自ラ巨屋ニ住スル
ヲ以テ其分限ヲ知ルノ矩彙トナル可シ唯華士
族官員ニ至テハ此矩彙ヲ以テ度ル可カラサル
モノアル可シ故ニ從來ノ官家祿賞典祿等ニ稅
スルノ制ヲ改正シ能ク其當ヲ斟酌シテ之ニ課
スルトキハ此弊ヲ防クニ足ル可シ
又此新法ニヨリテ徧直ノ什一ニ課スルトキハ
地租ハ或ハ減シテ現今收額ノ三分一弱ニ至ル

可キヤモ計リ難シト雖モ家稅分限稅等アリ且
茶砂糖ノ稅印紙稅アルヲ以テ大抵之ヲ補フニ
足ル可シ蓋シ我邦百業ノ進步甚タ後レタリト
雖モ幸ニ豐饒ノ地業已ニ閑ケタルモノ多ク且
未タ嘗テ耒耜ヲ下サハルノ地ニモ甚タ肥腴ナ
ル處少カラサレハ今ヨリ農租輕減シテ諸民均
一ノ擔ヲ負フニ至ラハ二十年ヲ出テスシテ農
術大ニ進步ス可シ本年津田氏カ媒助法ヲ施シ
行ノ驗ヲ以テ之ヲ觀レハ其收獲大抵十二三
ヲ增益セリトイフ然ルニ此法ノ如キハ只器械

ノカラ以テ結實ノ勢ヲ助クルノミナリ若シ他
學ノ理ヲ解シ土質變換糞渣應用ノ妙ヲ辨シ重
學ノ理ヲ明ニシテ東作西成ノ勞費ヲ省スルマ
テニ至ラハ農ノ利益ニ倍徒ノミナラサル可シ
且農地ノ租税大ニ増加スルモ民能ク之ニ堪ル
ニ至ル可シ然ルニ現法ノ如ク苛重ノ税ヲ負ハ
シノテ其四肢ヲ槌加シ竟ニ之レカ運動ヲ妨ク
ルニ至ラシムルトキハ民ノ破産失業スルモノ
日一日ヨリ殖シ國ノ貧困匱乏スルノ年一年ヨ
リ急ナルニ至ラハ終ニハ極フ可ラサラントス

又革税說ニ論述スル如ク凡ソ人民ノ所入タル
モノハ尙直雇直得益ノ三路タレハ此中一路ノ
所入ニノミ税スルトキハ財本ノ流通ヲ妨ケ自
ラ國ノ貧乏ヲ來スモノナレハ此三路ニハ均一
ニ租税ヲ課當シ此弊ヲ防ク可シ是レ家屋屋地
ノ尙直ニ税シ全國人民ノ分限税ヲ起ス所以ナ
リ
又右三税ヲ起シ其所置精詳ニ至ルトキハ國家
ニ不測ノ憂アリテ外征防禦ノ備ヲ為スニ方ツ
テモ唯其税ノ准抵ヲ増加スルノミニシテ一時

ハ其緩急ニ給スルニ足ル可シ故ニ唐突無着ノ
税ヲ起シテ害弊ヲ永久ニ傳フルノ患ヲ防ク可
シ其詳ナルトハ革税説ニ論述ス

允ソ此三税ノ中地租ノ外他ノ二税ハ從來國力
ノ統計ヲ記セルノ書冊ナク又歐米諸國ノ如ク
記録局遺念記録局保險會社其他經濟ニ関セル
社會等アリテ人民ノ財産ヲ量知ス可キモノナ
キニ由テ其收額ノ豫算ヲ為ス克ハサレハ前ニ
地租ハ減スレ氏此二税ト間税トニ由リテ大抵
從來ノ收額ニ充フルニ足ル可シトイヘルモ其

實ハ臆測ノミ但シ之ヲ施行スルノ前ニ方ツテ
務メテ精密ニ其課當ノ准額ヲ推測ス可キハ論
ナシト雖モ若シ其足ラサルニ會スルトキハ紐
育府ニ於テ行フ所ノ税金抵當公債證書ノ如キ
モノヲ發行セハ一年ノ不足ハ之ヲ補フニ足ル
可シ此證書施行ノ方法モ亦革税説ニ演述ス可
シ
又此新税法ヲ草スルニ方ツテ下管カ大ニ苦慮
スル所ノモノハ租税ヲ收集スルノ費用ナリ是
レ各國ノ政府ニ於テモ財政ニ関モノ、極メテ

注意スル所ニシテ假令ニ税法ハ均一精確ナリ
 ト雖モ其費用大ナレハ則チ民人ノ負擔自ラ重
 カラサルヲ得ス我邦從來ノ制是レ等ノ事ニハ
 曾テ注意セラレスト見エタリ乃チ一昨明治六
 年収入ノ税額總計シテ四千九百五十五万五千
 九百圓零々三十錢強ニシテ之ヲ收ムルカ為メ
 ニ官費一百零七万五千四百九十五圓四十錢強
 民費六百零八万二千五百八十八圓九十二錢強
 ヲ要セリ之ヲ合シテ收税ノ費用收額百分ノ十
 四強ヲ要セリ蓋シ談歲ハ地券檢査ノ事アルカ

為メニ殊ニ民費二百万圓ヲ要セシナリト雖モ
 其費用亦大ナラスヤ 明治七年ハ民費ノ統計未
 成ラサルヲ以テ之ヲ缺
 又右歳入ノ中證券印紙税ヨリスルモノハ其額
 僅ニ三十六萬五千零九十七圓ニシテ之ヲ收集
 スルカ為ニ八九萬五千五百一十三圓十錢強ヲ
 費ヤセリ之ヲ收額ニ比計スレハ百分ノ二十六
 弱ニ當リ又同七年同税ノ收額ハ三十八万九千
 一百零六圓八十六錢ニシテ之ヲ收集スルニ一
 十三万四千七百五十二圓九十三錢強ヲ費ヤセ
 リ之ヲ收額ニ比計スレハ百分ノ三十五弱ニ當

ル但シ當年ハ建築ノ為ノ一萬圓餘ヲ費ヤス
トイヘハ其費額ハ平年ノ比筭ト為ス可ラズト
雖モ亦無比ノ冗費ト謂ハサルヲ得ス蓋シ此冗
費ヲ要スル所以ノモノハ立法ト行法トノ分立
タサルヲ以テ所謂廻議ナルモノ、為メニ曰ニ
繁劇ノ事務ヲ處スルト帳簿ノ記法其要ヲ得サ
ルニ由リテ空ク多人ヲ使用スルト其他收税ノ
區分ナクシテ盡ク地方ノ金錢ヲ大藏ニ集入セ
ントスル等尚ホ百般枚挙ス可ラサルノ勞ヲ要
スルヨリ起ルナル可シ此冗費ヲ省スル新法ヲ

用フルニ於テハ幾何ナルカ其精筭ヲ得スト雖
モ豫メ期ス可キナリ

府縣稅

府縣稅ノ事ハ腹稿未タ全ク成ラスト雖モ大抵
左ノ諸業ニ課收セハ府縣ノ費用ニ充ルヲ得可
シ

表下ニ掲ク

石ノ内漁魚ノ收稅第一ニ居ル可シ但シ此ニ載
スル所ハ其最モ租稅ヲ收メ易キ所ノ諸業ヲ抄
出セルノミ府縣各土宜民業等ノ異アルヲ以テ

實地ニ就テ検査スルニ非レハ其收税ノ額ハ論
ナク又他ニ租税ヲ課スルモ大ニ人民ノ煩累ト
ナラサルモノアル可ク是レ等ハ机上ノ考案ニ
テハ決シテ見出し得可キニ非ス唯下官カ拙案
ヲ以テスレハ從來行ハレタル諸雜税ノ如ク諸
職工ニ課シ或ハ百般猥雜ノ商業ニ課シ且其課
法理ノ基ク所ナキトキハ民心ヲシテ嫌惡セシ
メ隨テ收額モ甚タ寡カル可シ幸ニ本年二月中
多ク此課目ヲ廢セラレタルヲ以テ自今更ニ課
セラル、モノハ宜ク煩累ヲ省キテ收額ノ多キ

モノヲ選ム可シトス乃チ右ニ表示セル所ハ此
意ヲ以テスルモノナリ但シ此等ノ諸業ヲ營ム
者モ猶ホ嚮ニ述ル如ク全國ニシテ幾千アリヤ
一府縣ニシテ幾何アリヤ計知スル能ハス隨テ
收税ノ額モ豫算ス可カラスト雖モ諸問屋ノ如
キハ大抵富者ニシテ大利ヲ得ルモノナレハ適
宜ノ税ヲ負フモ其情實大ニ困却スルニハ至ラ
サル可ク然レハ其數ハ少キモ相當ノ税ハ收ム
ルヲ得可シ又從來ノ雜稅收額中魚漁稅ノ如キ
ハ其第一ニ居レリ米國ウオレル貴見地ニ亞州等ノ稅制

方法ヲ裁酌セハ相當ノ稅ハ收ムルヲ得可シ又
食鹽ハ從來地租ニ屬スルモノアリ即チ鹽田或
鹽濱ノ類
ハ雜稅ニ屬スルモノアリ如鹽等是亦須ク其分
ヲ明ニシテ地ニ就テハ地租ヲ課シ物ニ就テハ
製鹽何程ニシテ何程ノ稅ヲ課スルトイフノ方
法ヲ立ツ可シ是等ノ事ハ知事縣令等各其所見
アル可ケレハ下官カ呷々ヲ要スル所ニ非スト
雖モ亦一論セサル可ラサルモノアルヲ以テ其
大要ヲ取テ革稅說ニ載ス可シ

國府縣稅ノ法制ヲ立ルニ就キ大ニ深思細議

ヲ要ス可キノ條件アリ便チ第一民費ノ名ヲ
廢シ今ヨリ租稅ノ收額中ヨリ之ヲ給スル是
ナリ第二乙ニ國府縣稅ヲ分テル上ハ大政府
ト府縣政府トノ費用ハ宜ク之ヲ資給スルノ
財源ヲ分チ大政府ノ費用ハ國稅ヲ以テ之ニ
充テ府縣政府ノ費用ハ府縣稅ヲ以テ之ヲ給
ス可キ是ナリ

凡ソ府縣民費ノ名ヲ以テ徵收スル所ノ金額明
治六年政表課ニ於テ編纂スル所ノ民費表ニ據
レハ一千五百三十一萬五千零七十二圓二十六

錢餘ニ登ル

盤前酒田滋賀鹿見島佐賀ノ五縣ハ未夕上申セサルヲ以テ此中ニ算セ

ナルヨ

租税ノ收額ニ比スレハ當年ノ歳入ハ四

五千九百圓零々三十一錢強ニシテ汽車郵

便電信鑛山等ヨリノ收入ハ之ヲ除クナリ殆シ

ト三分ノ一ニ居ル而メ其用途ハ之ヲ二十八條

ニ分テリ下官カ卑見ヲ以テスレハ此中一モ人

民ノ自費ヲ以テ給ス可キモノナシ但シ学校費

邏卒費道路橋梁堤防費用水剝水道費消防費等

ノ如キハ他邦ニ於テハ或ハ殊ニ之ヲ課スルモ

ノアリト雖モ豫メ其地方ニ於テ要スル所ヲ算

シテ租税ヲ以テ之ニ充ルヲ最良ノ法トス石二

十八條中最モ異ムニ堪ヘタルモノハ地券調費

檢見下組及其内外等ノ費ニ給スルモノナリ抑

地券ノ如キハ有主ノ權ヲ保護スルカ為メニ官

ヨリ之ヲ領賦スルモノト雖モ該年此検査ヲ為

スハ全ク收税ノ為メニスルナリ檢見等ノ費ハ

固ヨリ言フヲ俟タス然ルニ之ヲ官ヨリ給セス

シテ而メ民ヲシテ之ヲ充テシム何ソ其謂レナ

キノ甚タシキヤ今俗間通常ノ事況ヲ以テ之ヲ

譬ヘンニ甲某アリ貧困ニ迫リテ其友ナル乙某

ノ惠ヲ乞フ乙某之ヲ諾シテ貸与ノ日ヲ期ス期

己ニ至リタルヲ以テ甲某使ヲ遣シテ其金ヲ受
ルヲ請ヒ且其使ニ囑シテ道路往還ノ費ヲ乙某
ニ乞ハシメハ乙某天性柔善ナリト雖モ安クシ
ソ為メニ怒ヲ發セザランヤ今租税ヲ收ムルカ
為メニ民費ヲ課スルハ全ク之ニ同シ而モ其額
百分ノ十二ノ重キニ及フヲヤ蓋シ民費トイヒ
官費トイフモ其實ハ皆人民ヨリ出ル所ニシテ
更ニ其別ナント雖モ名正シカラサルヲ以テ乃
チ前ノ鄙論ニ似タルアルナリ且區々長等ノ給
料取扱所費用ニ至テモ下官カ聞ク所ニテハ最

モ漫濫ヲ極メタルニ似タリ之ヲ要スルニ民費
ノ名ヲ廢シ從來之ヲ以テ充テシ所ノ費用ヲ給
スルニ租税ヲ以テスルニ若カス是レ下官カ擔
繫ノ事ニ非スト雖モ竊ニ胸懷ニ往來スルモノ
久シ因テ亦併セテ革稅說中ニ論述ス可シ
今宜ク國府縣費用ノ資源ヲ分ツヘシトイフ所
以ハ若シ之ヲ分ツトキハ其冗費冗勞ヲ省シ財
本ノ流通ヲ利スル等當ニ理財上ニ利益アルノ
ミナラス大ニ國ノ開化ヲ進メ人望ヲ收メ中央
政府ト環圉ノ政府ト相制シ相副ケ以テ其政機

ヲ變理スルノ妙處ヲ得ル等治術上ノ利益多カ
ル可ケレハナリ

夫從來府縣政府ノ費用ナルモノハ其官員ノ月
給ヨリ一切ノ經費ニ至ルマテ猶ホ諸省費用ノ
如ク定額ヲ立テ、大藏ヨリ之ヲ給スルモ其大
藏ヨリ支給スル所ノ財本ハ何處ヨリ發スルヤ
ト問ヘハ海關稅家官祿稅等ヲ除クノ外ハ總テ
地方ヨリセサルモノナシ是ヲ以テ一旦之ヲ地
方ヨリ取りテ復タ之ヲ地方ニ支分スルナリ故
ニ之レカ為メニ費スル所ノ費用ハ誠ニ冗費ニシ

テ要スル所ノ勞ハ誠ニ冗勞ナリ蓋シ定額ヲ立
テ、其費用ヲ制限スルハ從來ノ茫漫ニシテ制
限ナキニ比スレハ其愈々萬々ナルハ素ヨリ論
スルヲ要セスト雖モ已ニ定額ヲ立ル上ハ地方
ノ税金ヲ大藏ニ納メサルニ先ツテ其分ヲ取去
シテ之ヲ納メ其會計ハ帳簿ヲ以テ開報セシム
ルモ亦妨クル所ナカル可シ然ルヲ此ヲ為サス
シテ徒ラニ此勞費ヲ糜盡スルハ何ノ故タルヲ
知ラス若シ下官カ鄙按、如ク國府縣稅ヲ分課
スルニ於テハ此勞費ノ如キハ冗ナル者ナ

リトス

附リ收税區ヲ立ルハ米國ノ制ノ如ク或ハ税
官ニ任スルニ官金辨理ノ任ヲ以テシ或ハ出
納寮出張所ヲ置キ或ハ官金依託所ヲ設ケ税
官及所属ノ費用ハ無論鎮臺ノ費用其他一切
大藏ヨリ支給ス可キモノハ之ヲ辨給セシム
ルヲ可トス

古語ニ曰ク施ハ親ヨリ始ムルト然ハ則チ先ツ
一家ノ内ニ貧乏不足ノ者ナクシテ而後朋友郷
黨ニ及ホスハ人情ノ常ナリ人民ノ租税ヲ政府

ルノ下ヲ親シク感念覺
スルモノハ地方政府ナリ
故ニ租税ヲ中央政府ニ
致スハ恰モ外人ニ棄捐
セラル、如ク思ヒ地方
政府ニ納ムルハ己等モ
亦其外達ノ功ヲ被フ
ルヲ期スルカ為ニ猶ホ
一家ノ子弟ニ支給シテ
後未ノ償剛ヲ期スル
カ如キノ情アラサルナ
キヲ得シヤ故ニ此兩稅
ノ別ヲ立テ、各其責
途ヲ異ニス、字ヲ脱ス

ニ輸スモ亦此情ニ似タルアリ夫レ中央政府ハ
全國政機ノ發スル所ナレトモ人民其管轄ヲ受
ケ保護ヲ被フルトキハ設使ヒ府縣廳學校ノ建
築道路橋梁ノ修繕等ハ少ク華飾ニ過クルモ我
府廳ハ如何我道路ハ如何ト人民互ニ競フテ其
地方ノ富ニ誇ルノ情アリテ工業其他一切ノ事
業モ進歩自ラ速ナル可ク且地方官等モ各其地
方金穀ノ權ヲ握ルヲ得ルトキハ其材器ニ應心シ
テ或ハ工業稼穡ヲ勸メ或ハ學術智識ヲ進メ或
ハ運漕水利ノ便ヲ促ス等總テ人民ノ福祉安寧

ヲ謀ルノ術ヲ盡スヲ得可ク又闕下諸官ニ比ス
レハ鄙情ニ熟スルヲ以テ其課税ノ方法ニ至テ
モ自ラ裁酌其要ヲ得ルヲ多カル可シ然ハ則チ
地方ノ開化ヲ進メ且民情ヲモ收ムルヲ得テ兩
全ノ策ト謂フ可シ

附リ近來論者モトテリ集權チセトヤリ散權チセトヤリ事ヲ唱フル者アリ
其說今ニ始メヌトニシテ彼邦ニテハ此論ア
ル已ニ尚シ然ルニ諸國政府動モスレハ權ヲ
中央ニ集メシムルヲ欲ス殊ニ所謂英主ナル者
出ルトキハ必ス此弊ヲ來ス近世佛國第三世

那翁ノ如キ是ナリ此翁モ初メハ地方人民

タリ允リ此治術ヲ用フルノ國ハ地方ノ人民
ト云 常ニ貧困ニシテ開化ニ後ル、ト甚シク其弊
終ニ一國ニ及フト雖モ異ム可キハ其之ヲ省
ス可キヲ思フ者實ニ少キナリ徳川氏ノ治策
顯テ之ヲ用ヒシハ已ムヲ得サルニ出テタル
ナル可シト雖モ今ニ至テ都鄙開化ノ度ヲ異
ニシ富貧ノ殊ヲ殊ニスル甚シ蓋シ此治策ノ
弊害ハ今其證ヲ引キテ此ニ之ヲ辨明スルニ
由ナシト雖モ敢テ考ルニ我邦ニ於テハ散權

ノ治術ヲ用フルヲ希フナリ今此ニ府縣ノ稅
ヲ以テ府縣ノ費用ニ給セシムルヲ欲スルモ
亦此意ナリ縣官ニ地方收稅ノ權ヲ任スルハ
專斷ノ恐レナキニ非ス然レ氏民
會ヲ立テ、之ヲ議セシムルニ至ラハ又過慮
ヲ要セサルナリ又地方稅制ヲ立テ及ヒ收稅
區ヲ置ク等後未民會ヲ立ル
カ為ニ大ニ關係スル所アリ但シ此等ノ大事
ヲ議スルハ下官カ權限ニアラスト雖モ竊ニ
鄙說アルヲ以テ他日草シテ賢裁ヲ仰カント
期ス今偶語次ノ此ニ涉ルヲ以テ敢テ之ヲ贅
ス

次ニ又緊要ノ一議アリ士族ノ家祿賞祿ヲ府

縣稅ヲ以テ給スルノ事是ナリ夫レ本年七月七
日第百六十八號太政官ノ布告ニヨリテ每地方
五年ヨリ七年マテ三年間貢納石代米價ヲ以テ
給スルトキハ則チ士族ノ家祿大約一千四百ニ
十三萬八千五百一十圓五十八錢強ナリ此大數
ノ金額モ亦從來ノ制ニ據レハ府縣ノ定額ト共
ニ一旦大藏ニ納メテ又之ヲ支給スルナリ假令
實地
ハ然ラ其レ斯クノ如キトキハ輒チ一倍ノ勞費
ヲ要ス可シ聞ク近頃貢米金納ニ改メラレシヨ
リ各地方一時ニ多數ノ金額ヲ東京ニ收集セラ

ル、カ為ニ大ニ金銀之匱ノ患アリ寮中ニ於テ
モ之ヲ救ハントスルノ議アリト下官カ卑考ヲ
以テスレハ此家祿モ亦地方ニ於テ收ムル所ノ
收額ヨリ直ニ之ヲ分給セハ或ハ此患ヲ防クノ
一助トモナル可シ然レ氏尚進シテ良法ヲ求メ
シニハ府縣稅ヲ以テ之ヲ支給スルヲ愈レリト
ス可シ其故ハ斯ノ如クスルトキハ地方ノ金錢
ヲ一時ニ東京ニ集メサルヲ以テ理財上ヨリ論
スレハ金銀融通ヲ妨ゲサルノミナラス後未士
族ヲ處スルノ術ニ於テ大ニ利益アル可ケレハ

ナリ夫レ士族ノ家祿ハ猶ホ家屋土地ノ如ク永
世ノ産業タルト否ラサルトヲ問ハス今實地ニ
於テ現ニ之ヲ抄没ス可ラサルナリ近年奉還ノ
方法ヲ立テラレシト雖モ未タ其實効アルヲ見
ス是レ時未タ至ラス機未タ熟セサルノミナラ
ス其求ムル所亦道ヲ得サルニアルナル可シ蓋
シ政府ト人民トカ此大負擔ヲ釋クノ良策ハ祿
ヲ受クル者ヲシテ自ラ其心ニ愧耻セシメ祿ヲ
給スル者ヲシテ自ラ其負擔ノ重キヲ苦想セシ
ムルニ若カス所謂心ニ愧耻セシムルトハ道德

ノ教誨ヲ以テ之レラ化スルニ非ラス其負擔ヲ
苦想セシムルトハ苛歛ヲ以テスルノ謂ニ非ラ
サルナリ。

今夫レ士族ノ人口甚タ多シト雖モ其^所ノ
家祿ナル者ハ果シテ何レヨリ出ルカヲ知ルモ
ノ寡ナク只偏ヘニ政府ノ府庫ヨリスルトナス
モノ多シ是ヲ以テ政府其額ヲ減セントテ企テ
或ハ之ヲ奉還セシムルノ策ヲ設クルモ皆之ヲ
朝官ノ私ニ出ルトナシテ怨望ヲ極メ甚シキハ
則チ助ヲ干戈ニ假リ其私有ノ權ヲ防禦セント
ス又此祿ヲ給スルノ民ハ其致ス所ノ租税ハ獨
リ聖上ノ厨膳寢御ノ用ニ充ルモノト爲スカ
或ハ一層進ミタル知見ヲ有スル者ニテモ官吏

カ給俸ニ充テ官廳ノ修美ヲ爲スカ爲メニ收斂
スルモノト爲スニ止リ更ニ此素餐徒食ノ冗民
ヲ養フノ額斯ノ如キノ大ナルニ至ルヲ知ル
モノナク偶新聞紙面ヲ假リテ歎クヲ費ス者ア
リト雖モ實ニ指ノ一二ヲ屈スルニ過キサルノ
ミ是ヲ以テ士ハ徒食シテ耻ルヲナク民ハ之ニ
給シテ曾テ其患源ノ在ル所ヲ知ラス此ノ如ク
ニシテ過了セハ千萬歳ノ後ニ至ルト雖モ政府
ト人民トカ終ニ此大負擔ヲ卸スノ期ナカル可
シ今下官カ陋見ニヨリテ府縣ノ稅ヲ以テ之ヲ

給セシメ以テ毎歲府縣出入ノ會計ヲ刊行シテ
人民ニ知ラシムルトキハ士ハ之ニ因テ人民ニ
空ク養ハルヲ知リテ羞耻ノ心ヲ生ス可ク民
ハ此徒食ノ人ヲ養フヲ曉リテ自ラ負擔ヲ厭フ
ノ情ヲ生ス可シ是ニ至リ民迫リ士困セハ勢ヒ
此祿ヲ廢スルノ期應ニ遠カラサルヘキナリ此
間政府又蕪地ヲ開キ工場ヲ興ス等ノ措置ヲ以
テ此冗民ヲシテ自ラ食ニ就カシムルノ策ヲ立
テハ干戈ニ費スルヲナサズ民心ヲ攬スヲ
ナサスシテ國家永久ノ大負擔ヲ解ク亦容易

ナル可シ是 下官カ府縣稅ヲ以テ士族ノ家祿ヲ
支給ス可シトイフ所以ナリ

以上ノ二事ハ國府縣稅ノ別立チテ大政府ト府
縣政府ト各之ヲ維持スルノ資本ヲ分ツニ於テ
ハ容易ク之ヲ舉行スルヲ得可シ唯士族ノ家祿
ヲ府縣稅ヲ以テ給スルカ爲ニ障壁タルノ點ハ
士族ノ祿各地方ニテ額ヲ異ニセルヲ以テ其多
キ地ハ人民負擔ヲ被フルト重ク或ハ府縣稅ノ
ミヲ以テ給スル克ハサルトアレ可キ是ナリ現
ニ鹿兒嶋縣ノ如キハ其金額九十三萬五千二百

五十圓七十九錢強ニ登リ石川縣ノ如キハ八十
一萬八千二百四十二圓餘ニ滿ツ然レトモ國稅
三種ノ中一稅ヲ以テ之ニ充テハ必ス之ヲ償フ
ヲ得可シトス又道路橋梁修繕費ノ如キハ分頭
稅ヲ起シテ之ニ充ルモ可ナリ原來分頭稅ハ說
者ノ論甚タ多シト雖モ政府ノ特恩ヲ被フル者
ニハ其准抵ヲ重クシ又カラ之ヲ致ス克ハサル
モノハ一歲ニ二三日出テ、躬カラ修繕ノ役ニ
當ラシムル等ノ方法ヲ設ケハ貧民ト雖モ亦爲
メニ困スルトナカル可シ

腌過ノ肉	以上一割	増大毎二	〇・〇三	内外製トモ
	十割以上	此ノ割以下	〇・二	
糖浸ノ菓	廿五割以上	増大毎二	〇・四	金
	以上十割	増大毎二	〇・一五	
舶來菓子	十割以上	増大毎二	〇・一五	身自來物ノ總ヲ
	廿五割以上	増大毎二	〇・四	
油浸ノ魚	以上十割	増大毎二	〇・一五	内外製トモ
	廿五割以上	増大毎二	〇・四	
木製連火奴	廿五割以上	増大毎二	〇・三	
	以上十割	増大毎二	〇・一五	
蠟製連火奴	廿五割以上	増大毎二	〇・三	
	以上十割	増大毎二	〇・一五	

免許税ヲ賦課スルキ商業

質屋	旅人宿	家屋ノ口入	代言人
古着屋	諸車	借馬	遊船宿
料理屋	揚弓見世	人寄	芝居
貸坐敷	音樂師	紺屋	
賣場高ニ税ヲ賦課スルキ商業			
藥種屋	呉服屋	金貸	魚問屋
干鰯問屋	乾物問屋	針問屋	古道具屋
糶屋	毛皮屋	瀬戸物屋	砂糖問屋
茶問屋	葛問屋	粉問屋	金銀箔師

六歳自

錫細工師 玉細工師 時計屋 袋物屋

小間物屋 菓子屋 樂器屋 烟管屋

烟草入問屋 繪雙紙問屋 白粉問屋 紅問屋

鼈甲屋 氷問屋 扇問屋 塩辛問屋

魚 漁

鳥 獸 獵

